

四月を迎え、明け方早く東の空に見える星は、月末に向けて明るさが増してゆく「明けの<sup>みょうじょう</sup>明星」です。この「明けの明星」は、三月までは夕方に西の空に輝く「宵の<sup>よい</sup>明星」でした。この星、見え方は違いますが、同じ金星です。

この二つの明星は同じ金星ですので、同じものを見ているということもできますし、同じ季節に同時にみることができず、見える方角も見える時間も異なりますので、別のものを見ているということもできるでしょう。

「明けの明星」と「宵の明星」、どちらか一方の呼び方だけが正しいということではありません。

このようなことに限らず、物事<sup>ものごと</sup>の正しさについて話題になるとときには、それぞれ人の立場によって正しさが異なるということは、決して珍しいことではありません。

自分の立場から見た正しさに<sup>とど</sup>留まり続ければ、相手の立場から見える正しさと衝突してしまうでしょう。一方が「自分の方が物事があるがままに見ているのだから、自分の方が正しい」といえば、相手にも同じことがいえます。自分の正しさと相手の正しさとを比べて「自分の方がもっと正しい」と思い、それぞれの立場からより<sup>つぶさ</sup>真に見ようとすればするほど、正しさ同士の衝突が大きくなっていくようです。

さらに、「あるがまま」なものとして、というところが強調されると、その物事を「自分」の視点で見ているということをつっかり忘れてしまい、ともすると、自分にとって見えるがまま、自分にとって見たいがままが「あるがまま」にすり替わってしまうこともあるのです。

仏教の「<sup>しょうけん</sup>正見」は、「正しく見る」と書きます。この「正しく見る」とは、物事<sup>ものごと</sup>を自分の視点から自分勝手に見るということではなく、仏の教えに照らして見ることとを指します。お釈迦さまは「一切皆苦」、あらゆるものは思うがままにならないものであると説きました。「苦」とは思い通りにならないということで、物事を自分の思うがままではないものとして、「正しく見る」のです。

何をどの視点から見るかではなく、どのようなものとして見るのかが大切であり、そのためには先ず、思い通りにしようとする自分の欲望、自分の見方を見つめ直すことが大切であると説かれます。

<sup>ほとけ</sup> 仏の<sup>まなこ</sup> 眼を通して、自分の見方そのものを見つめ直すことも、私たちにとって大切なことではないでしょうか。